

## 大衆運動を通じて学んだこと

私は今までマルクス主義的な対象変革について、それが主体と客体との相互変革であり、観照的な関わりではなく、主体的、内在的に対象と関わらなければならないと思い続けてきた。しかし実践的な対象との討論や、街頭での情宣ではそういった認識とは逆に、「こう考えるべきである」「何々するべきである」と、常に一方的な変革を対象に要請していたのである。

実は私がこのように考えはじめ、何とかして克服していきたいと思ったのは、直接には四年間もわれわれとともに運動に参加していたAさんという友人が、「あなたがたとは、もう関わりたくない」と言ったことを契機にしている。そしてその問題は、単に私の大衆運動上の問題としてだけではなく、それ以上に私の物の考え方、他者との関係の取り結び方を、根底で規定し続けている問題なのではないかと思うようになったからである。

われわれが情宣やオルグなどで主要に問題にすることは、ブルジョア社会のように疎外された人間関係を超えて、対象とのいきいきとした関係を取り結ぶことにあると思うが、せっかく討論ができる関係ができても、われわれの気持ちの中に、その対象を「動員」としてしかみることができなかつたとしたら、そこでの討論対象の思いや気持ち汲み取って、ともに闘っていくことなどできないのではないだろうか。

市民社会に矛盾を感じ、われわれの主張に共感をもって関係を取り結んでいる対象に、われわれは同一の型はめをし、ブルジョア社会での「建前と本音」ではないが、「あるべき人間像」なるものから現実を撫で斬つていくのでは、その人間の発展がまったく措定されない。

また組織内で、革命党における同志間の関係をどう取り結ぶのかといった問題を討論しようと、会議などの場で、その多くの時間を費やして問題にしてきているにも関わらず、なかなか他者に関われなかつたりするのも、やはり同様の問題なのではないかと思う。

昨年、山根同志の「実践と省察」が出され、われわれの「科学主義」や「客観主義」がいきいきとした討論や実践を阻害しているということが問題とされた。討論の深まりが、そのまま組織的前進につながらず、客観的対象化としての理論的深化へと問題が切り縮められていき、ゆえに他者に対する批判の突きつけだけが自立化していくといったように、問題の解決にはなんら連なつていかないという構造を、われわれはなんとしても打ち破つていきたいと思っている。

ゆえに本稿では、私のAさんへの対応に見られるような陥穰を超えて、人間としての高みに達することのできるような運動の構築をめざすべく、この間の経験を血肉化して、今夏期一サミット決戦にむけての大衆運動の高揚を、なんとしてもかち取るべく、問題の整理を成しきっていきたい。

## 一、Aさんとの討論を通じて考え始めたこと

私がAさんと始めて会ったのは、八九年三里塚における七・二〇事態直後の三里塚集会だった。当初、討論を組織していた同志からAさんとの討論を引き継いだ私は、八九事態というわれわれに突きつけられた客觀情勢的な困難を、主体的に受け止めながらも、大衆運動についてはまったく位相のちがうものとして、自らに位置付けようとしていた。つまり、八九事態下での階級闘争を「党のための闘い」としてわれわれは、主要にはスターリン主義の内在的克服を目指し闘いながら、一方では「党としての闘い」において、党的プレゼンスの拡大を、大衆との広範な結合を基盤として実現するという、一個二重の闘いとして組織的には確認していくのである。しかしいざAさんとの討論になると私の主張は『戦旗』の政治主張にしかなっておらず、逆に彼を追い詰めてしまったのである。

それはAさんが私にとつてはじめての組織的な討論の相手であり、今まで決意だけだった私が、他者との合意を始めて問題にしていくなかで生起した問題であったといえる。

私は、八九事態という階級情勢のなかで、革命の大儀とマルクス―レーニン主義をなんとかして守り抜こうと思続けていた。そして、それが彼との討論にも反映されてしまったのである。

例えば以前、Aさんとパレスチナ情勢をめぐって討論していた時に、彼がイスラエルの入植は純宗教的な行為で、理解できるのではないかと言つたことに対して、私は感情的に反発してしまったことがある。それまで私はパレスチナへのイスラエルの侵略を絶対に許せないとと思っていたから、Aさんがなぜそれを理解できるのかという

事にまで思いをめぐらすことなく、その意味では論断する形で彼の意見を一蹴してしまったのだ。

確かに、パレスチナ問題をめぐる視点は、純宗教的範疇に求められるものではなく、米帝の中東におけるプレゼンスの維持と、それをもっての石油支配の強化に求められるのではないかと思うが、だからといってAさんがキリスト者として、聖地エルサレムを擁すイスラエルを擁護することは、ある意味では自然であると思うし、そのような彼の思いを理解することなく、切り捨てるような討論をしてしまったことについては、あまりにも性急な関わりだったと言わざるを得ない。もっと説得的に彼の思いも理解しながら討論を進めていくことが私には出来なかつたのだ。

私自身が当時強烈に思っていた「共産主義的な」思いをそのままAさんに強制することが、そこでの私の関わりだったといえる。「中国人民の革命性を我が物にする。」「ベトナム人民や韓国民衆の鬪いに連帯する。」といった私自身の決意が、それとして彼との討論にも持ち込まれてしまい、それこそ私にとっての「真理」を、道義者宣しく彼に啓蒙してしまったのだと思う。

私の「熱き思い」はともかくとして、知り合って間もない友人としてのAさんに対して、『戦旗』が共通の問題意識に成らないことははつきりしているし、そのことは私自身も理解していないかった訳ではない。しかいざ討論の段になると、私の口を突いて出るのは、それが自分自身への突きつけでもある「かくあるべし」「でなければならない」になってしまふのである。そういった私のAさんへの対処は、その帰結として彼の主体をギリギリと問い合わせてしまうことになってしまったのだ。

その結果、Aさんは以前から関係のあつた、某新興宗教団体主催の海外ツアーハー参加したいので、われわれとの関係を控えたいと言いだしたのである。

われわれの説得虚しく、結局彼は旅行に行ってしまったのだけれども、この過程の討論を通じて、Aさんに対

するわれわれの関わりの不充分性を改めて捉え返す機会になった。

それは、革命運動における内延的発展と外延的発展の区別と連関をはつきりさせ、Aさんとの人間的な関係を取り結び、一定の信頼をかち取つて、内容的な合意をつくつていくようなモメントが、今までの討論にはなかつたということである。そしてそこでは私のAさんへの関わりの誤りとして、大衆運動と組織活動が完全に統一されていて、両者が並列に論じられる傾向が問題になつた。それから具体的な対処としては、もつとAさんとの対等な関係を作つていき、そこでの合意を問題にしていくことが必要ではないかという結論になつた。

旅行から帰つたAさんは、われわれに対してかなり不信を抱いていたが、私は彼に真摯に自己批判し、粘り強く説得をするなかで関わりを終わりにすることだけは、なんとか回避したのである。その後、しばらくして、今度は任務上私が組織局を離れることになり、Aさんとの討論を中断することになった。そして再び戻ってきたのが昨年の始めになる。

その間は他の同志が代わつて彼との討論を行つてきたわけであるが、再度私が引き継いで、再び討論を行つていくにあたつては、前回の総括を踏まえて、もっと打ち解けて話せるような環境を作りだしていくこうと思っていた。殊にAさんは市民社会的にも極めて疎外された待遇を受けていて、例えば職場では上司や同僚に能力差をめぐつて差別やいじめを受け、極めて神経過敏になつてゐる面があつて、そういう障害を取り除けるような合意を作つていくことがまず重要だと思つたのである。

疎外されたブルジョア社会の延長上に私とAさんの関係を作つていかないようにと、彼に対する言葉遣いも、今までの敬語使いをやめて、友人が他者を気づかうような言葉遣いに変えていったし、会つて話をする日も、できるだけ定期的な期間で会えるようにしていった。もちろんそういったハード面での対処に止まらず、内容的な結合をあくまでも問題にしようとしていったのだが、今までのようには、討論などでこちらの問題意識を彼に

提起していくのではなく、普段、彼が問題にしていることをめぐって討論が組織できればいいと思っていた。だから新聞やテレビなど日常的なことを切り口にしながら、彼の問題意識に踏み込んだ討論を徐々に行おうとしていった。

総じて目指したことは、できるだけAさんとの距離を縮め、政治討論に止まらない日常的な会話をも問題にしていくなかで、信頼し信頼される関係を取り結んでいこうとしていたのであった。

折しも情勢的には、カンボジアへのPKO参加をめぐって、自衛隊の海外派兵が強行されていこうとしているなかで、国論が二分されていき、彌が上にも気運は盛り上がっていた。慌ただしく反対運動や闘争が取り組まれ、六月には国会にまで乗り込んで、PKO法案（当時）の廃案を要求する運動を展開していった。Aさんも始めは戸惑っている様子だったが、日々移り変わる情勢が、それを担っているわれわれの運動によって変化しているという実感を彼自身も感じ取っているのか、私に対しても少しづつ打ち解けて話をしてくれ始めた。

わたしもこの間の反PKO展開を、地域での反基地運動として、彼とともに一緒に作ってきたんだというこという思いがあつたから、その共同作業によって今の成果があるんだということを、討論を通じて彼と確認していくことをした。六月を頂点とするPKO法案反対の闘いを引き継いで、九月には自衛隊の派兵阻止を求めて、京都の大久保基地や朝霞観測式反対の闘いを積み重ねていくなかで、歩みは少しづつかもしれないけど、お互いの信頼をかち取つていけたのではないかと思っていた。

私の当時の気持ちとしては、このままでいけばAさんの組織的結集も展望できるのではないかと確信していたので、そのためにももっと内容的な討論を積み重ねていくべきだと思っていた。その意味では、私の意の上でAさんは、もうわれわれのすぐ側まで接近していたといえる。しかし私の意に反して、彼は私が思うほどわれわれに接近してはいなかつたのだ。それはある日の討論で、地域主催の反基地集会へ彼を誘つた時であった。

いままでも何度も何度か都合でいけない集会もあったし、そのときもいけないと拒まれたときは、行けない都合でもあるのかという程度に考えていた。それで理由は何故なのかと、私としては軽い気持ちで聞いてみたのだが、それで帰ってきた彼の言葉はとても衝撃を受けた。曰く「自分には自分の考えがあるので、あなたたちといつまでも同じことはできない。PKOのような闘争はやつてもいいけれども、反基地の集会には興味がないので行きたくない。」というものだったのだ。私はこれまでの一年間、彼に語ってきたことや、彼と一緒に新しい運動を作ろうとしてきたことが、全て無駄になってしまったとそのとき思った。

しかし考えてみると、そこで私が「すべてだめ」と考えてしまった根拠こそが、一番の問題なのではないか、ということなどが次第に分かつてきたのである。

私が彼の問題意識に踏み込もうとして、今まで討論してきたことは、たとえばイスラエルの問題であれば、「私はこう思うけど、Aさんの言うこともわかる」式に、以前の主体をぎりぎり問うことを恐れるあまり、今度は問わないことが彼との関係の取り結び方などと、早合点してしまい、おまけにわれわれとAさんの意見の相違は温存したままでここまでこまできてしまつたのであつた。

その意味では私のAさんに対する関わりは、すべからく組織集約に従属していく、われわれのこうあって欲しいという願望をAさんに投影して、彼の行動や発言に一喜一憂し、「理想のAさん」という価値判断のもとで彼を評価していくといえるのだ。だから「いつまでも一緒にやりたくない。」といわれて、それまでの成果がすべて無駄だったなどと思い込んでしまうのである。

そしてもう一つの要素として思うのは、そういった「○か×か」といった判断を基準にして評価していく場合、そこでの経緯や過去をすべて切り捨てていくということである。私は当初「こうあるべき」という討論でAさんを問い合わせていった経緯について、彼とその事についてじっくりと話し合うことができなかつた。その路線ではだ

めだからこれにと、言葉使いをかえたり、対処を変えていくというようなソフト路線に転換していくことで事足りりとしていたのである。しかしそれでは、彼にとってみれば、担当者が何人も入れ代わったこともあるが、われわれの乗り移りともいえる対処で、関わってきた歴史が寸断されてしまうのではないだろうか。

以前誤りだと思い、そこからどうやってその誤りを克服するのかという思いだけが先行してしまうことのなかで、過去はすべてだめだったという確認と、全く新しいものがそれに対置されていつてしまふ連なりのなかに、Aさんのわれわれに対する不信が存在していたといえる。しかしそういったわれわれのAさんに対する関わりを通じて、われわれの組織活動上の問題にも、それは通底するものがあるのではと、そのとき改めて思い始めたのである。

## 一、「何でもできる主体」が理想になっていく発想とは

それは昨年の一二・二〇集会の過程で、わが支部のK同志がカンボジアに派遣団として赴くということがあつて、私ともう一人のK-I同志とで、情宣をふくむ支部の運営を行っていくなければならない状況になつた時であつた。そのとき私は、とにかく今までK同志に依存していた行政的、内容的なことまで含めて、引き受けていかなければと強固なまでに思っていた。そして、その結果生起したことは、そういったわれわれの陥穽を象徴している。

それはそれ 자체とるに足りない問題でしかない、社防ノートを書くか、書かないかということをめぐって、私とK I 同志が論争になったことを契機としている。K I 同志はこの社防ノートというのは、機能上マンネリ化している現在では、書いても意味がないのではないかと自分の中では確信していて、今まで私やK I 同志が書いているにも関わらず、一人だけ書かずにいたのである。

確かに、毎日の社防ノートを「捷」のように付けることに意味が在るわけではない。しかし私は、組織として書かなくともいい理由があるのでしたら、ちゃんと討論して、総体の問題として決めるべきだと思っていたので、K I 同志のように自分が納得しないから、ノートを付けなくともいいということにはならないのではないか、という提起をしようとした。しかし実際K I 同志に語っていく言葉は、「戦略的武装の観点がない」だの「決まつたことはちゃんと励行しなければならない」といった「ねばならない」的理想的押しつけでしかなかつた。

そのあとしばらくしてK I 同志から、私が他者に自分の意見を押しつけていると批判を受けた。あまり他者に對して批判をしなかつたK I 同志の言葉に、私はほんとにその通りだと思った。なぜならば、自分ができているのに、なぜ彼女にはできないのかというトーンで、それまで私は討論を組織していたのだ。K I 同志が不在であるという状況のなかで、何とかしなければというすさまじい決意と氣概だけが、そこでの私を振り動かしていた駆動力であり、そのことは、下部主義を超えていくという問題意識を横溢させたものとしての、積極的な要素を持つものであつたと今でも思つている。

しかしそこでは責任の私所有とでもいうか、K I 同志の責任を引き取つていくんだという氣概や意識が、次第に自分がK I 同志になつていくこととして自分のなかに位置付いていったのだと思うし、「なんでもできる主体」としてのK I 同志を、無前提に私が乗り越えの対象として指定していたことと、それは無縁ではないといえる。

そういった「なんでもできる主体」こそが素晴らしい、過渡的な主体はそれに従うという発想が、私を含めて、

当時の支部のなかに存在していた、ということがそこでの問題であつたのだ。

もとよりK同志が「なんでもできる主体」としてわが支部に「君臨」していたのではなく、そこでの討論も「絶対者」としての「小スター・リン」が人民を啓蒙していくといった、一方通行的な討論など目指していたのではなかったことは自明である。しかし当時のわれわれの共同主観性との関係から捉え返すならば、「客観的真理」を体現する（しようとしている）K同志を含めた、われわれの問題意識のなかに、組織的ヒエラルキーを超越した上位下達のランク付けといえるものが存在してしまい、それに拘束される形で、あたかも「教室」での「先生」と「生徒」とでもいえる関係が、現出してしまったのではないかと思う。

そして当時紛れもなく、K同志に對して能力的、イデオロギー的に「劣つて」いる（そう思い込んでいる）私が、イデオロギー・コンプレックスに陥り、彼に規定される形で下部主義的な関係をしか、組織に對して取り組んでいけなかつたのもまた事実である。

「客観的真理の体系」としての「科学主義」というパラダイムのなかで、「真理」に至つていく主体が、あたかも「マルクス—レーニン主義」的な主体であるかのような価値觀が生み出され、そうなつていらない自分はますます疎外されていく構造は、決してマルクスが切り開いた学知—ヴィッセンシャフトな思想ではありません。それはスター・リンの「弁証法的唯物論」にみられる科学—サイエンスの体系であることを確認していくと同時に、もつといきいきとした討論を組織していくためには、現状から始まってなにをなすべきなのかを、それこそ自分や他者の生きざまを問うものとして、すべてをきらけ出して、辛辣に、しかしその中で、同志の苦しみを受け止め、引き受けていけるような関係を作っていくことが、ブルジョア社会を超えて、人類史を突き動かしていくマルクス・ラジカリズムの復権をかち取つていくことにつながるのではないだろうか。

Aさんとの討論にしても、彼の思いを引き受けながらも、そこでそのまま現状肯定し、彼に拝跪してしまう

ではなく、そこから引き返してくる。つまり彼の悩みや苦労を引き受けしていくような関わりのなかに、「いかに生き、いかに死すのか」という問いかけを発し合えるような関係を作っていくこともできるのだと思う。

今までAさんと討論しようとすると、とかく彼の問題意識からは離れ、自分が主体的に論じることに、ともすれば限定してしまいがちであった。しかしそこから捉え返して、転換しようとすれば、今度は全く逆のベクトルとして、彼に拝跪していくのでは、「悩みの相談者」とか「カウンセラー」としてのわれわれの関わりはあったとしても、なにも彼の変革を求めるにはならないのである。

ゆえに、今後Aさんとの討論を活性化させ、彼と「明るく開かれた未来」を共同して闘い取っていくためにも、「見いだされる主体」と「見いだす主体」の分離を克服し、「主客の統一」としての対象変革を内在化させながら、政策的には、九〇年代戦略の更なる豊富化としての「受け皿」—キヤパシティの拡大を目指し、対象の思いを引き受けていけるような組織建設を進めていかなければならないと思っている。

### 三、倫理主義的な主体を超えていくには

この間主体的に地区の活動を担っていた何人かの同志が、消耗を深め、苦しんでいたり、悩んでいるのを見るに、同じ組織で共に運動を作ってきた同志として、なんとかして元気付けてあげたいと心から思うし、そのためにも討論を通じて、また一緒に活動できるような関係を作っていきたいと誰もが感じているだろう。しかし彼ら

がなぜ消耗するのかということをわれわれが問題にしようとする、それは組織的な関わりの不充分性もあるが、最終的には彼ら自身の責任だということになってしまいがちである。

そこで問題になるのは、われわれの発想として、消耗している主体が常に「悪い主体」として措定されてしまうことである。自分が主体的に組織にコミットしている（と思い込んでいる）場合には、すべてが自分にとって位置付き得るものが、いたんさまざまな理由によって「主体的ではない」と判断されてしまうことによって、こんどはすべからく自分の劣っていることを確認しようとするとする。実際には「主体的」だと、自分が思っていた当時と何も変わっていないのに、「あれもない、これもない」という具合に、すべてが消去法で悪い方向へ向かっていくのだ。

物事に対する評価の基準が、「○か×」といったマークシートのようになっていて、「善か悪か」といった二元論ですべてを推し量るような発想は、先のAさんの問題となんらかわりない。

そして他の同志が消耗しているのに対し、元気づけてやらなければとか、悩みを聞いて討論しなければと思つてゐる反面で、主体面においては本質的にいつて「自分には無縁な問題」と発想してしまふわれわれも、一端落ち込んでしまえば、彼らと同じように消耗していかざるを得ないのでないだろうか。その場合「自分には無縁」なのではなく「自分だけはそうなつて欲しくない」から、自分には関係ないものとして理解しようとしているにすぎないのでだ。

これはわが地区に限らない事なのではないかと思うが、以前われわれが克服を目指した倫理的な問題把握からまだ自由ではなく、「望むべき理想的活動家」から現在の自分が位置付けられるという陥穽を引きずっているのではないかと思う。

私も八九事態のなかで、消耗していく同志が日々苦しんでいるのを、とても悲しく思い、何とか「立ち直って」

欲しいと思っていた。しかしそう思っている反面で、「彼らには私のように死を賭して革命党を守り、発展させることはできないんだ。」だから、「責任を負いきれない主体は淘汰されていくしかない。」と考えていたことも事実である。——当時「狼は生きる、豚は死ね」という言葉に、私がものすごく共感していたことがあるが――

しかし一番問題なのは、当時自分が当為だと考えていたことを、後になつて「過去の否定的な自分」とか、「過去にそう思つたのは『私の不徳の致すところ』などと捉え返そうとしている、私自身の問題の立て方なのではないだろうか。(『淘汰する』などと思つていたことについては現在も誤りだったと思うが)そしてその倫理主義とでも呼べるもののが、今まで克服されずにきてしまった証左として、この間の同志の消耗という事態も指定されるのではないかと思う。

もちろんそのように発想する私や、消耗している同志の主体を、そこでの個人的性向の問題に還元することはできない。なぜならば、当時紛れもなくあつた、組織の共同主觀性との兼ね合い抜きに、自らの発想もまたあり得ないのだから。

当時私や他の同志をも含めて、そこでの同意一間主体的関係のなかに「理想の革命家」なり「客観的真理の表現者」が存在しており、だからわれわれが「理想の革命家」などいないといつても、それ自身「建前」でしかも、当時のわれわれの価値観として、常に「完成された」、「理論的に整然とした」主体から見て、自分がどれだけ劣つているかが、自分なり、他者に対する評価基準になつていてし、それは現在においても、とくに主体面においては根強く残っているということを、われわれは認めていくことから、その克服にむけた闘いを開始していくのでなければならないと思う。

ブルジョアジーを超える、スターリニストを超えるといつても、それはブルジョア社会においてわれわれが是とし

てきたものを超えていくわけであるから、そこで「ふるい身の汚れ」とは、実は自らの全実存ともいえる価値観でしかありえない。そこからいってもすべからく全否定の対象になつたり、それに「画一的な」共産主義者を対置するということではないことは確認できるはずである。

もとよりわれわれのめざす「普遍的人間」が、現在のわれわれの能力や、価値意識からいって相対的なものでしかないことは自明であり、「理想の具現化」では全くありえないこともはつきりしている。

ゆえにわれわれ戦旗派が今まで問題にしてきた「人間の解放とは何か」ということを問題として、単に己を革命するだけではなくて、本当に人間が解放されていき人間としてより高次の段階に達していく在り方とは何かということを求めて、スタの破産を超えていく内実をわれわれは追求してきた。(『理論戦線』三八号 p44) その問題意識のうえに立つて、問題の克服を今後も進めていくことが求められるのではないか。

最後に、この文章を通じてAさんとの関わりや、組織の共同主觀性を捉え返し、七月サミット闘争にむけた大衆運動の高揚をかち取るきっかけになれば、本稿は意義があつたと思う。この総括を觀念的な自己満足に終わらせないためにも、Aさんとの関係をさらに発展させていくためにも、自分に更なる飛躍を課して、九三年階級攻防を主体的に切り開いていきたい。